

特 集：「地域農業将来の展望」 その3

暖地（九州）農業の将来図

九州農業試験場長

吉 川 直 行

求められた課題は、「暖地農業の将来図」であるが、ここでは「暖地」を「九州」とおきかえて考えてみることにする。

ところで、表題のような「地域農業の将来展望」なり、「九州農業の将来図」を、農業技術の試験研究にたずさわる試験場マンが考え、あるいは将来の方向づけをしたとしても、果してどれだけ有効——あるいは信頼性があるか、はなばだ心もとない話である。

実は、この原稿を書きはじめている途中に、突然、例の「石油の輸入制限」の情勢が加わり、これによって農業の事情も一変せざるを得ないような様相を呈してきた。

新聞、テレビの報道は、石油の輸入制限による影響は、日本の経済全体を根底から揺りうごかすものであることを伝えており、農業自体への影響の大きさは、素人目ですら深刻に認識することができる。

農林省の農林水産技術会議では、つい先月、「農業における試験研究の推進について」の指針を、4年ほどの期間をかけて検討して、決定したばかりである。この指針は、いわゆる研究推進構想というもので、こんご10年ぐらいはこの指針によって研究をつづけてゆこうというものである。

しかし、この研究推進構想も、今回の石油輸入制限によって、大幅に手直しせざるを得ないようになって来た。

石油が来なくなれば、肥料の製造も少なくなるであろうし、農業用資材としてのビニール類も少なくなるであろう。このほか、りん酸肥料の原料である燐鉱石の輸入も困難になるということである。

以上のように、国際的な情勢の変化によって大きく揺りうごかされる日本経済の中での農業を採り上げ、その将来を展望するということは、有能

な識者でもむづかしいという気がしてくる。とはいえ、農業を営む人が存在し、また、国家も農業を必要とすることは事実であり、その限りにおいて「農業を考え」、そして将来を展望して、進んでゆかなくてはならない。

1. 九州農業の進むべき道

九州農業をとりまく情勢、あるいは環境・条件の特長は、いつも云いならされているように、およそ次のことが挙げられる。

ア) 労働力：若い労働力が流出し、兼業化が進んでいる。

イ) 経営規模：耕作面積が小さく、しかも規模拡大ができない。これは日本では共通的であるが……。

ウ) 土地条件：土地が狭く、しかも多雨高温によって養分的に瘠せている。また、基盤整備がおかれている。

ロ) 気象条件：大雨による冠水、湿害があり、逆の干ばつも多い。また、梅雨、台風による被害が大きい。

以上のごとく不利性ばかり挙げられるが、強い有利性を挙げようとしても仲々見当らない。

このような条件の中で、九州農業は歩みが続けて来たわけであるが、これはひとえに農家の努力と農政への真摯な従属心によるものと思われる。

農政のめまぐるしい転換に対応して生き残った現在の農業は、表一に示すとおりである。

表一にみられるように、生産の減っているものは、生産調整による米と、収益性の面から漸減しているのは、麦類といも類である。このほかの作目は、わずかながら増加しているとみることができる。

昭和42年以降、増加をつづけてきたものは畜産と野菜、および養蚕である。

このような農業生産の伸びの大きな特長は、土

表一. 農業生産指数(九州) 45年=100

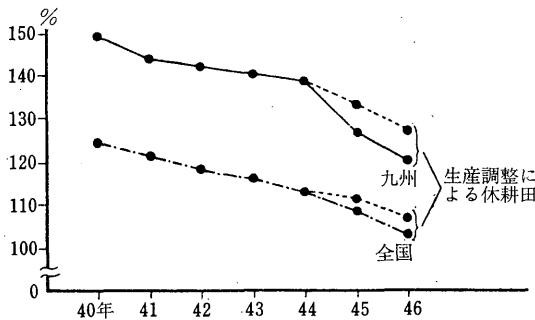
			42年	43年	44年	45年	46年
農 業 総 合			98.1	104.0	105.3	100.0	101.1
米を除く農業総合			86.2	98.1	97.2	100.0	106.7
耕 種	総 合	米	108.4	114.4	111.1	100.0	98.7
		麦	122.6	116.2	122.0	100.0	89.5
	野 果	類	180.5	234.8	154.9	100.0	127.2
		も	131.3	127.5	104.2	100.0	87.5
	工 芸 作 物	実	81.9	101.5	100.1	100.0	112.1
		物	65.0	92.2	85.7	100.0	99.9
養 蚕			120.4	124.2	113.2	100.0	109.0
畜 産	総 合	蚕	83.3	100.6	100.8	100.0	108.7
		乳 牛	72.9	78.0	90.9	100.0	103.2
	肉 用 牛	豚	74.7	84.8	96.0	100.0	98.4
		鶏	71.3	78.7	94.5	100.0	97.0
	食 肉 鶏	卵	82.2	79.5	87.0	100.0	114.5
乳		—	—	—	100.0	123.3	
生 産			74.1	80.9	90.9	100.0	110.6
			67.4	78.8	92.7	100.0	105.2

資料：農林省「農林水産統計年次報告」

地よりの生産でなくて、「装置化」, 「システム化」された方式による生産の伸びが大きいことである。たとえば、乳牛の多頭飼育、豚の多頭飼育、野菜の施設栽培の増加が挙げられる。

このような、労力を多くして収益が上がる作目は増えたが、さつまいもや麦などの一般普通作物は見棄てられていった。このことは、図一の耕地利用率の推移をみれば明らかである。

図一. 耕地利用率の推移



もうけの少ない麦、とくに水田裏作麦は急激に減って、昔から有名な筑紫平野のナタネ、筑後平野や佐賀平野の麦は減って、安楽死していった。

九州の耕地面積は小さいと前に書いたとおりであり、狭い土地を有効に利用すべきには必ずであるにもかかわらず、水田裏作は放棄され、冬の緑は白い土の肌を露わしている。食ってゆけない作物を誰が作るのか、そう云った風情である。

水田地帯では施設野菜が入り、それをやらない農家は給料取りに出かけ、兼業農家の増加となっ

てきた。畑作、山間地帯では、家畜を導入しない農家は、これも給料取りに出て農業への意欲を失っていった。

しかし、九州全体の農業生産指数は増加してきたのであるから、われわれ農業試験場マンも、農業の進むべき将来図を少しづつ、このような方向の中に夢を描くようになってきた。

しかし、たえず、「こう野菜ばかり作って大丈夫だろうか?」、「山という山にミカンを植えて、生産過剰にならないだろうか?」などといろいろな危懼を抱えてきた。

農業の本来的理想からすれば、「適地適作」であるはずであるが、農政の方向はこの方向に向けられず、米以外は輸入に依存することとなってきた。

九州農業の将来図は、「わが国の食糧は自給するという農政の方向」の土台のうえに立って、「適地適作と云う技術的の方向」から描かれなければならないと思われる。

では、つぎに作目別の一つ一つ、考えてみることにする。

2. 米は王様

九州地域内で、もっとも安定した作物は水稻である。作柄は安定し、しかも単位収量も全国平均に比べて劣るものでないので、将来とも米作は九州での王様である。

九州の米の穀倉地帯は、北一中部の平野部で、筑紫平野、筑後平野、佐賀平野、白石平野、熊本平野などで、ここでの単位収量は全国平均よりかなり高く、また技術的にも省力化されており、これらの地帯の水田を市街地化より守り、また基盤の整備をさらに進めなくてはならない。

稲作において、労力をもっとも食うのは田植えであるが、稚苗機械移植は九州全域で30%の普及、北九州の福岡県、佐賀県では50%以上も普及しており、この地帯での稲作技術は高水準であり、この技術は九州の他地帯、さらには全国の先導的役割を果すものと思われる。

省力で多収の地帯の農家の農業への意欲はつよい。これは裏を返せば農業収入で自立できることを意味するものである。さらに高収益農業へ発展させるためには、裏作を活用させること、ぎりぎ

りまでの省力化技術を創出することである。

佐賀県農業試験場では、新しいユニークな技術の確立を試みている。

それは、乾田直播米麦一貫栽培というもので、不耕起の乾田に稲を、作溝一施肥一覆土一播種一覆土一鎮圧を一台で出来る機械によって播種し、稲の収穫後、麦を稲と同じ方式で播種する新農法である。

この農法によれば機械は中型でも可能であり、米一麦に専用でき、水田裏作が容易となり、それによる収益の増大があるほか、余った労働力を他にふり向けることができる訳で、専業でなくてもよいという考えさえ持たれる。また、泥水に足を汚さない田植(播種)という夢も期待できる。

国際的な競争に打勝つ農業としては、いままでの常識から、飛躍的に省力化した栽培法でなければならぬ。限られた狭い面積の経営から、高収益の農業へ脱皮するには、効率のよい機械を使っての省力栽培に転換し、余った労働力を他にふり向けざるを得ないであろう。

稲作の省力栽培としては、現在は稚苗機械移植方式が本命であるが、一部では稚苗散播方式(俗に空中播き)が行なわれてきている。これらは、ともに湛水田で行なうもので、代かきを十分行なわないと苗の定着がわるいので、それだけ労力が多くかゝることになる。

前述の佐賀県農業試験場の方式は非湛水であり、乾田になれるように、用排水の整備が完全に行なわれていることが、前提条件となる。

稲作の将来のあるべき方式は、極端な省力栽培と、裏作を加えた高度利用であると考えられ、そのためには、水田はすべて乾田に整備されなければならない。

とにかく、水田裏作を行なえば、耕地が2倍になるということを十分認識しなければならない。

3. 畑の適地適作

九州の畑作地帯は、中～南九州が主たるものである。これらの地帯は化学的に不良な火山灰土壌が大部分であり、また病虫害、気象災害をうけることが多く低収である。農作物は価格が米のように国の保証がないので、安く、しかも不安定であるため、畑作は衰退の一途をたどってきている。

因みに、昭和46年の粗生産額を米と畑作物と対

比してみると、つぎのようになる。(表-2)

昔より畑の
主幹作物であ
った麦、豆、
いもの地位は
陥落して、い
まや miner
crop といわ

表-2 九州の作物別の粗生産額

	粗生産額	構成比
米	1941億円	28.5%
麦 類	134	2.0
雑穀・豆類	42	0.6
い も 類	198	2.9
野 菜	815	12.0

1) 資料：農林省「農業所得統計」より抜粋。

2) 構成比は、全農業粗生産額における比率である。

れるまでになってしまった。この作付けの急激な減少は、価格が安いことであり、農産物の輸入の自由化による国際競争に勝てないからである。

野菜のシェアは高いが、これは施設野菜も含まれているので、畑作とはいえない。結論的には、九州の畑作はこのままでは亡びゆく運命にあるとすることができる。

わが国の麦類、大豆の自給率は5%以下であると聞かすが、国際的にみて日本の食糧確保は、果してこのまゝ放置しておいてよいものであろうか、大いに疑問をもつものである。たしかに九州の立地条件は麦、大豆については不利である。しからば畑作として、一体なにを作ったらよいであろうか。

大豆：まず大豆についてみると、九州の大豆栽培は、病虫害発生の消長から、夏大豆(4月～8月、南九州)と秋大豆(7月～11月、北九州)とがあるが、いずれも病虫害のほぼ完全な防除を望むならば、10回以上の薬剤散布をする必要がある。

それでもなお、気候条件からくる過繁茂、梅雨、台風などの災害があって、全国の平均収量よりかなり低い。おまけに価格が安いことから、見すてられるのは当たり前であろう。

大豆作を定着させるには、価格の保証ではダメで、面積保証をしない限りは無理のようである。

麦類：麦類についても同様で、赤かび病、暖冬の寒波、収穫期の梅雨によって、収量は低く、不安定である。とわいえ、大豆よりも技術的改善によって作付け増大の余地が残されている。すなわち、極早生化による梅雨回避、機械化による省力化一とくに前述の米一麦一貫栽培によって改善される。

かんしょ：かんしょについては、適地適作からみたばあい、もっとも九州に有利な作物である。夏の高温に適し、干ばつ、台風につよい。このよう

な有利性ももちながら作付が減少してきているのは、でん粉用としての需要減退による価格の低下に理由があるようである。

でん粉の加工利用の分野の拡大に関する研究を促進して、かんしょの有利性を活用すべきであると考える。

4. 畜産は君臨する

九州の生長部門として、酪農、肉用牛、豚、にわとり(卵、ブロイラー)が挙げられる。これらは、食生活の向上による需要の低下が考えられない現状においては、発展が望まれるであろうから、飼料基盤の恵まれた地帯では、有利性が発揮されるであろう。

5. 施設園芸の将来

全国に占める九州のハウス設置面積は20%以上であると推定され、将来の発展がさらに期待され

たが、このたびの石油問題からの波及よりみて、ハウス園芸を見直す必要が生れてきた。

ハウス園芸の理想とすべき将来は、九州の温暖多照の利点を活かした作物の種類、栽培方式を創出して、燃料、資材のあまりかゝらない、独自の道を求めるべきではなからうか。

おわりに

前半に冗長な文句を述べたために、触れるべき他の作目を割愛せざるをえなくなってしまった。新春に当って、九州農業の洋々たる明るい将来図を描くつもりであったが、石油危機で明るい材料はなくなってしまった。

やはり農業は、時の流れに身をまかせ、自らの道を探さなくてはならぬものなのか。ただ、最後に国の方針としての「食糧自給」の政策確立を念願するものである。

あ と が き 　　まずはともあれ、明けましてお目出
たく昭和49年の新春のご祝詞を申し上げます。

昨年は何や彼やと、本当にお世話になりまして有難うございました。厚くお礼申し上げますとともに、本年もよろしくご指導賜わりますようお願い致します。

石油パニックが与えた衝撃とその影響は全く深刻なものがあります。今年はその傷痕がもっと大きくなるだろうというのが、一般的な観測であります。果してどうでしょうか。

いずれにせよ、資源は有限である—ということは厳たる事実であり、「石油が駄目なら、原発で行こう」という考え方も、濃縮ウランを資源とするアメリカ型原発を採用する限り、その濃縮ウランの取得で行詰まることを忘れてはならないようです。

かって「考える農業」が提唱されたことがありましたが、これからの「日本」には、十分な思考力が要求

されるでしょう。「物マネ」はダメだということでしょうか。

とまれ、当面する難関は、何としてでも切り抜けなければなりません。そのためには編集者も、できる限りお役に立ちたいと考えております。

どうか、ますます元気に活躍されんことをお祈り致します。

(K生)

お断り：12月号でもお断りしたように、当面する経済状況から本誌も用紙節減の止むなきに至りましたので、16頁建てに組終った12月号を改めて8頁に修正するとともに、24頁建予定のこの特集号を16頁に圧縮し、更に手許の原稿を以て8頁建ての2・3合併号として発行することになりました。このため、執筆者、読者各位には何かとご迷惑をおかけ致しますが、事情ご覧察のうえご諒承下さるようお願い申し上げます。

(係り)